

台頭するBRICsと日本の関係

【ポイント】

1. BRICsは、開放経済へと経済政策転換を行なうことにより成長への礎を築き、大きな人口規模などを背景に存在感を増している。
2. BRICsと日本の経済関係は、中国に偏ったものであり、他の3カ国との関係は希薄である。
3. 今後のBRICsとの経済関係は、中国以外の3カ国は拡大への問題を抱える一方、中国については、魅力的な国内市場を睨んで企業進出が増加することで、関係はさらに強まるだろう。

BRICsとは、ブラジル(Brazil)・ロシア(Russia)・インド(India)・中国(China)の4カ国の頭文字を取った造語であり、2003年にゴールドマンサックス証券の投資家向けレポートで使用された。このレポートによると、BRICsのGDP合計額は、2039年にはG6(アメリカ・日本・ドイツ・イギリス・フランス・イタリア)のGDP合計額を上回り、さらに2050年には経済規模の順位が中国・アメリカ・インド・日本・ブラジル・ロシア・イギリス・ドイツ・フランス・イタリアの順になると予測しており、BRICsが注目を集めることとなった。2004年のBRICs諸国の実質GDP成長率をみると、中国の前年比9.5%増を筆頭に、インドが同7.3%増、ロシアが同7.1%増、ブラジルが同4.9%増と続き、いずれの国も高成長となっている。ここではBRICs各国の成長の背景及び日本経済との結びつきについてみていく。

1. BRICsの現状

まず初めにBRICs諸国の基礎データを確認する。

図表1. BRICs諸国の基礎データ

	人口 (万人)	人口 増加率 (%)	合成特殊 出生率 (人)	GDP (ドル換算、 10億ドル)	GDP (購買力 平価換算、 10億ドル)	1人当たり GDP (購買力平価 換算、ドル)	産業構造(GDP比、%)			直接投資 受入額(注1) (百万ドル)
							農業	鉱工業	サービス業	
ブラジル	17,900	1.28	2.1	631	1,462	8,328	10.1	38.9	51.0	18,166
ロシア	14,300	▲0.46	1.3	582	1,449	10,179	5.0	36.0	58.9	9,420
インド	107,900	1.43	2.9	691	3,290	3,029	20.4	28.2	51.4	1,314
中国	129,900	0.59	1.9	1,649	7,335	5,642	15.2	52.9	31.9	54,936
日本	12,700	0.05	1.3	3,817	3,774	29,905	1.3	25.6	73.1	37,459

	インフラの整備状況							
	1人当たり エネルギー 消費量(注3) (石油換算kg)	1人当たり 電力 消費量(注3) (kwh)	道路 延長 距離(注3) (千km)	国土面積比 道路延長 距離(注3) (km/千km ²)	鉄道線路 総距離(注2) (km)	国土面積比 鉄道線路 距離(注2) (km/千km ²)	鉄道貨物 輸送量(注4) (百万トン km)	航空貨物 輸送量(注2) (百万トンkm)
ブラジル	1,093	1,776	1,725	203	30,403	4	154,870	1,478
ロシア	4,288	4,291	573	34	85,542	5	1,373,000	1,113
インド	513	380	3,315	1,008	63,140	19	312,371	580
中国	960	987	1,765	184	60,627	6	1,390,200	5,651
日本	4,058	7,718	1,172	3,101	20,096	53	22,131	7,985

(資料)世界銀行、IMF、ジェトロ、総務省より富国生命作成。データは注を除いて2004年の数値

(注1)インドは2003年の数値、(注2)は2003年の数値、(注3)は2002年の数値、(注4)は2000年の数値

人口

BRICs 諸国は、人口規模が大きく世界でも上位に位置しており、BRICs の人口だけで世界人口の約 4 割を占めている。中国では 1979 年に人口抑制政策、いわゆる「一人っ子政策」を導入したことにより、合成特殊出生率が抑制されており、人口増加率も縮小（1990 年前年比 +1.45% 2004 年同 +0.59%）している。一方、ロシアでは、生活不安による出生率の低下と自殺・病気などによる死亡率の上昇などにより、1990 年代前半の 1 億 4,800 万人をピークに人口が減少傾向で推移しており、2004 年の人口増加率は前年比 0.46% と BRICs の中で唯一の人口減少国となっている。

経済規模

IMF ベースの購買力平価（それぞれの通貨の購買力が等しくなるように計算した各国通貨の交換比率）でドル換算した 1 人当たり GDP は図表 1 の通りであるが、日本と比較すると大きな開きがある。1 人当たり GDP の過去 10 年間の年平均伸び率は、中国 +9.7%、インド +6.1%、ロシア +5.3%、ブラジル +3.3% となっている。

経済政策

BRICs 諸国に共通していることは、いずれの国も様々な改革を行なっていることである。最初に経済政策転換へ取り組んだのは中国であり、80 年代に経済特区を設置したのを始め、段階的に経済圏を開放するなど外資誘致を積極的に行なっている。その他 3 カ国も 90 年代に入り改革を押し進めている。

インドは、中国に倣って経済特区の設置を実施し、直接投資認可の原則自由化など自由主義経済体制へ移行する経済改革を実施している。

ロシアはソ連解体以降、市場経済システムへ向けて急速な経済改革を行なった結果、ハイパーインフレ、生産活動の大きな落ち込み、金融危機などの混乱を招いたが、これらを克服する過程での緊縮財政、為替切り下げなどの改革がインフレ抑制、輸出産業の競争力強化などにつながり、現在の成長の基礎となっている。

ブラジルは、国内産業を保護する為の閉鎖経済政策から対外経済開放政策へ転換すると同時に、民営化などの構造改革や通貨の切り替えなどの市場改革を行なっている。

インフラの整備状況

エネルギーの使用状況をみると、BRICs 諸国は十分なレベルではないが、比較的ロシアが進んでいる。寒冷な地域ということもあり、ロシアの 1 人当たりエネルギー消費量は日本を上回っている。一方、ブラジル、インド、中国は日本との差が大きい。

輸送環境については、各国とも国土面積比での道路建設、鉄道建設ともに、日本との比較でみると低水準である。鉄道貨物輸送量は、ロシアと中国が大規模なものになっており、ブラジルとインドは大きく遅れている。

2 . 日本と BRICs の関係

日本と BRICs の貿易関係をみると、2004 年の日本から BRICs への輸出金額は前年比 14.6% 増の 8 兆 9,145 億円、BRICs からの輸入金額は同 23.4% 増の 11 兆 4,936 億円となり、BRICs との貿易量は日本の総貿易量の 18.5% を占めている。この数字だけを捉えれば、日本と BRICs の貿易関係は順調に拡大しているが、国別にみると BRICs との貿

易量の約 9 割が中国との取引であり、ブラジル、インド、ロシアの各国は、日本の貿易総額の 1%にも満たず、3 カ国の合計でも 2%を占めるにすぎない（図表 2）。

日本にとってアメリカに次ぐ貿易相手国である中国との貿易関係をみると、2004 年の日本の対中輸出は前年比 20.5%増の 7 兆 9,942 億円、対中輸入は同 16.8%増の 10 兆 1,990

億円と輸出入ともに 5 年連続で 2 桁増となった。総貿易量に占める中国の比率は前年比 0.9 ポイント上昇し 16.5%と、1991 年以来シェアの拡大が続いている。日本と中国の貿易関係には、日本から電気機器や一般機械などの資本財を輸出し、中国から繊維製品や家庭用電気機器などの消費財を輸入するという特徴があり、これは中国では人件費が日本と比較して低く生産コスト削減の理由から、生産拠点を日本国内から中国にシフトさせてきたことが背景にある。

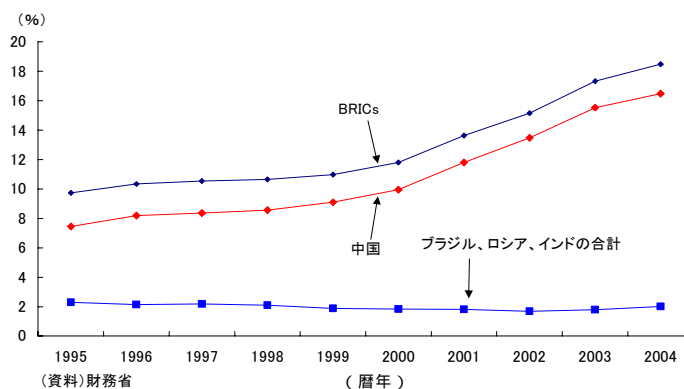
日本とロシアの 2004 年の貿易量は 9,456 億円と総貿易量に占める比率は 0.86%と低い水準である。しかし、日露貿易は 2003 年より拡大しており、貿易量の前年比伸び率は、2003 年、2004 年それぞれ +31.5%、+37.5%と高い伸びとなっている。輸出入についてみると、対露輸入の前年比伸び率が 2003 年、2004 年それぞれ +19.6%、+25.9%になり、また対露輸出の伸び率は、それぞれ +72.6%、+65.3%と高い伸びになっている。ロシア国内の自動車市場の拡大などから、対露輸出のうち乗用車などの輸送用機器が 6 割以上を占める。また、世界的な需給逼迫から天然資源価格が高騰したことにより、対露輸入は原料別製品や鉱物性燃料が約 6 割を占めている。

日本とブラジル（伯）の貿易量は、1997 年の 8,069 億円をピークに減少しており、2004 年は 6,487 億円となった。日本とブラジルの関係には、距離的に最も遠いという地理的に不利な条件があり、総貿易量に占める比率は 0.59%となった。対伯輸出は自動車の部分品、ベアリング及び同部品などの部品輸出が多く、対伯輸入は鉄鋼石、鶏肉、アルミニウムなどの一次産品が大部分を占め、ここ 10 年ほど品目に変化がみられない。

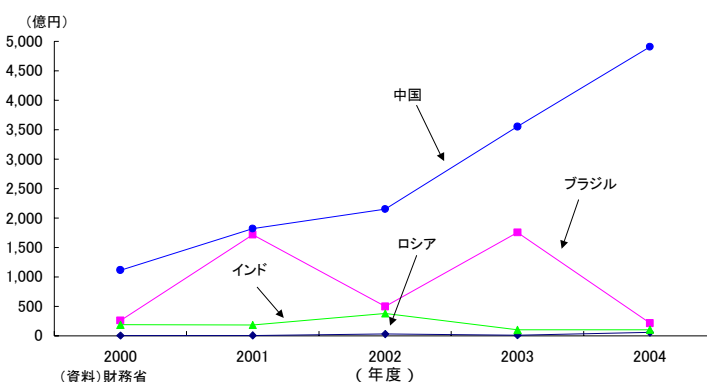
日本とインドの 2004 年の貿易量は 6,116 億円と BRICs の中で最も少ない。対印輸入金額は概ね横ばいとなっている一方で、対印輸出金額は 2003 年、2004 年の前年比の伸び率がそれぞれ +18.2%、+19.1%と高い伸びとなった。輸出入を品目別にみると、インドからの輸入はダイヤモンドなどの非金属鉱物製品、海産物、鉄鉱石で輸入金額の半分近くを占め、輸出については一般機械と電気機器で輸出金額の 45.4%を占め、資本財中心となっている。

次に、日本から BRICs 諸国に対する直接投資額をみると、中国の外資誘致策に加え、安価な人件費もあっ

図表 2. 総貿易量に占める BRICs の割合の推移



図表 3. 日本からの BRICs への直接投資額の推移



て日本企業は生産拠点の移転を進め、中国に対する直接投資額は製造業を中心に増加しており、また、2004年時点で18,136社の企業が中国に進出している。

一方で、ブラジル、インド、ロシアに対する直接投資額は低水準での推移となっている（図表3）。ジェットロによると、各国へ進出している日系企業数は、ブラジルへ1,783社（1951年度～2004年度累計）、ロシアへ84社（モスクワ、2004年7月時点）、インドへ231社（2003年8月時点）となっている。調査時点が異なっているため、ブラジル、ロシア、インドへの進出状況を互いに比較することは出来ないが、中国と各国を比較すると、日本からの進出企業が明らかに少ないといえる。

2004年度の国際協力銀行のアンケート調査結果を用いてみると（図表4）日本企業は中期的（今後3年程度）有望事業展開先として、2000年度同様、中国が最も有望だと考えている。また、インドを有望視する企業も増えており、ロシアについても2000年度調査では20位内にも入っていなかったが、2004年度調査では6位へと躍進している。ブラジルは2000年度調査では14位、2004年度調査では13位となっている。

図表4. 中期的有望事業展開先

順位	2004年度	2000年度
1位	中国	中国
2位	タイ	米国
3位	インド	タイ
4位	ベトナム	インドネシア
5位	米国	マレーシア
6位	ロシア	台湾
7位	インドネシア	インド
8位	韓国	ベトナム
9位	台湾	韓国
10位	マレーシア	フィリピン

（資料）国際協力銀行

3. まとめ

国際協力銀行のアンケートでは、インドとロシアは今後の事業展開先として有望視されてはいるものの、インドへ進出するにあたっては、インフラの未整備が課題、ロシアについては治安・社会情勢が不安という回答が多く、また、中国を有望視している企業の約7割が具体的な事業計画を持っているのに対し、インドとロシアについては約8割が具体的な事業計画を持っていない。

今後については、ロシアは2005年末のWTO加盟により貿易取引上の障壁がなくなること、貿易量が拡大する可能性がある。特に、自動車産業はずそ野が広く、大手自動車メーカーのロシア進出に伴い自動車部品メーカーなどの進出拡大が期待できる。インドは、経済特区があるもののインフラ関係の整備がほとんどされていないという不満があるように、早急なインフラ整備が経済関係拡大の条件となるだろう。ブラジルはアメリカ、EU、メルコスール（ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイの4カ国の関税同盟）との結びつきが強く、また日本にとっては地理的に不利な条件があるため、日本とブラジルの経済関係が急速に強くなる理由が見当たらない。

BRICsは、政策転換によってもたらされた経済基盤や人口規模などを背景に、今後も成長を続けていくと予想される。しかし、ブラジル、ロシア、インドは前述した問題を抱えており、日本とBRICsとの関係は、中国に偏った状態が続く可能性が高い。元の動向次第では、中国を生産拠点として進出している企業に制約を及ぼすであろうが、中国国内市場は今後も拡大を続けると見込まれることから、国内市場を目的とした進出が増加し、経済関係はさらに強くなっていくだろう。

（財務企画部 宮里 祐二）